

「諏訪藩に伝わる『鷹書』の翻刻と注解」

『鷹之書』大―(五)

代表 堀内 勝*

メンバー

大橋 和 華**

小瀬 園 子***

箕浦 芳 浩****

(五十音順)

Verification, Translation and Notes of
 “The Large Book on Falconry”
 Transmitted Through the Suwa Fief
 (5th Part)

Masaru HORIUCHI*

Waka OHASHI**

Sonoko OSE***

Yoshihiro MINOURA****

はじまり

愛知県の犬山市で、去る10月17日(日)、「秋の犬山お城まつり」の行事の一環として「鷹狩公開」が行なわれた。鷹匠箕浦氏が

担当して、これで三度目になる。城内の天守閣広場で行なわれ、多くの観客を集める中、大鷹二据による実演が行なわれた。鳩を追っての鷹の襲撃は、猛禽の本能を垣間見ることができ、往時のもののふの感興を一瞬だけではあったが共有できたのではないか、と思われる。鳩にはあらかじめ胴着が着せられ、怪我もせずに済んだ。残念であったのは会場が狭く、また中央に二本の松の木があるために邪魔となつて鷹の十分な飛行ができず、従つて完璧ではない形で瞬時に終つてしまったことである。鷹のまた鷹匠の能力を思う存分發揮させられ得る環境作りも切に望まれ、またこの伝統行事の存続を願つて止まなう。

* * *

今回翻刻をしたのは巻五の全巻である。原書二二六頁中、七二頁八行目より、九六頁七行目までである。第五巻は以下の八節より成り、その内容は統一のとれたものではなく、本論を済ませた補遺のようなものである。事実この後に続く第六巻は鷹の病氣とその治療法に移る。

第三二節、鷹なつて様の事。網掛けでとつた鷹の手懐け方を述べたもので、野据の前の内据えの記述に新鮮味がある。

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

**前人文系列 (Former Department of Liberal Arts and Sciences)

***前非常勤講師 (Former Part-time Lecturer)

****吉田流鷹匠 (Falconer, the Yoshida method)

第三節、鳥屋出の鷹相しらひ取飼様心得口伝の事。大物捕り（鶴・雁捕り）の「鳥屋出し」から調教及び実獵に入る段階の注意点を述べたもの。

第四節、鷹に経緒指口伝の事。経緒の重要性・用途・扱い方についての記述である。

第五節、定規切ッ懸の事。この節、次節は、今までにない短いもので、節として一括して良いか迷う。この節は実獵に持つてゆく鷹の肉具合、その見定めが大事であるとの注意の喚起である。

第六節、雁鷹に鈴を差と云事。狩り用の鷹に鈴を付けることは普通に行うが、この節は特に雁取用の鷹のことを述べていることに注意する。「鶴取り」よりも恐らく数の多い「雁取り」だからこそ、鈴付けもまた重要な手順であったのであろう。なおこの節、注⑩参照。

第七節、鷹に口餌を飼口伝の事。ここでは口餌を何時、どのような機会に、どのように与えるかを述べている。口餌の関連から餌として、鳥の羽節と並んで、犬や猪の肉が言及され、犬が鷹用餌として用いられていたことが明らかとなる。

第八節、鷹の肉当りたる見立様の事。この節の内容は節題とは異なり、「肉当りたる見立」ではなく「外見の良相」の見立であって、第二節の内容とほぼ同様である。本節の注の個々には二二節との異同が述べてある。

第九節、鷹据拳渡。この節は鷹を拳に据える折の注意点を述べたもので、前五ヶ条とその後の部分とは節を異ならせてい

た可能性があるが、内容は一貫しているので原文のまま同一節とした。

以下翻刻中の注で（放）とあるのは宮内省式部職編纂『放鷹』昭和六年発行（昭和五十八年 吉川弘文館再版）の書からの引用である。

* * *

今回の分の中に鷹具として足革（③注④参照、大緒（③注②参照）、経緒（③注③④及び第三四節全体参照）、餌づと（③注①参照）、忍縄（③注②⑦、④注①④等参照）、鈴（③注②参照）が登場する。前三者に限って通文化的視点から、アラブ世界の鷹具と比較をしておこう。我が国の鷹はオオタカが中心であり、アラブ世界は（及び全世界的にみても）ハヤブサが中心である点、前者の方がより力強く、野生本能も強いために鷹の装着具はより強く製せられるのが一般的特徴と言える。

足革は英語では皮で輪を作るところから *leather loop* と言い、より専門用語では *jess* と言う。*jess* の方はラテン語の *jacere*、即ち *to throw*（放つ、投げる）から由来し、*eject* とか *jet* と派生を同じくする。アラブ・イスラム世界では *sibag* と言い、両股に分れるために双数形、*sibagan* というのがより厳密な語法である。図1参照。*sibag* とは元来は「枷」の *hayt* と *qayd* と同義とされる。足革を装着することを *isbag* と言い、その動詞 *sab-baga* とは「鳥に足革を装着する」意味となる。アラブの足革は皮か、木綿糸、図2の如く上級なものは絹糸でより合わせて製せられる。

図3のように足革に接続し、鷹を据える繫き紐となるのが「経緒」及び「大緒」である。「経緒」は世界共通に鷹狩用に必須の用具であるが、「大緒」の方は実用というより鷹鑑賞用のものと言え、我が国のみで発達したものである。まず経緒であるが、これは実猟の際にも装着したまま放たれることもある。こうした場合には長すぎると、鷹の身の自由や重量への対処があるので、短か目のものが用いられる。

「経緒」は英語では leash と言い、ラテン語 lazare (広くする、ゆるめる) から由来し、relax と語根を同じくする。足革とつながることで身の自由が広くなり、リラックスできるからである。leash は「経緒」という名詞だけでなく、「(犬などを)革ひもでつなぐ」という動詞にも用いられる。成語として hold in leash (鷹、犬などを)革ひもでつなぐ、strain at the leash (犬、鷹などが)革ひもを引っ張る(人間が)自由を得たいとかがぐ、もどかしがる などがある。もう一つ鷹狩用語として creance がある。「鷹をつないでおく細紐」の意味であるが、1300年頃鷹狩のために作られた言葉で、通俗ラテン語 credentiam が語源で、古仏語を経て英語となった。credence(信用、信頼)の意味で、紐で繋ぐことによつて credence を得ることにより、こう名付けられたのであろう。

アラブ・イスラム世界では munsif mubbat と言う。前者は「身を自由にするもの」、後者は「身を縛るもの」の意味で好対称の表現である。アラブの経緒は 5 m 60 cm の紐を組む形で作られ、より上級の経緒は足革に接続している紐と後続する紐の間には

金輪で繋がる(図1参照)。この金輪は鳥がバタついたり、紐がこんがらかるのを避けるためのものである。我が国では「自在軸受け」とか、「回り継ぎ手」とかの語が当てられている。また俗に「さる鰻」とも言っており、英語では swivel (この語は 1307—8 年頃生まれたことが判明しており、古英語では swifan と言い、revolve 即ち「回転する」の意である。swifan から他に swift の語が派生したとされる)。アラブ世界では、mujawwal または mudawwar と言い前者は「絶えず動き回る」から、後者は「ある場所の周囲を歩き回る」からどちらも「回る・回転するもの」として「さる鰻」の意味となった。

我が国の独自の経緒である「大緒」は流派によって、また格式によって色を異ならせたものとなっている。「大緒」の「大」は太く大きい緒の意味であらう。鷹の体に比して不釣り合いな随分と太い紐なのである。しかし、この大緒の付された大鷹が鷹匠の拳上や架に止まっている姿は様になっており、一幅の絵にもなる程である。アラブ世界でも、飾り経緒に絹や綿の彩やかな色紐が見られる。青、赤、黄などたて縞に入れたり、長い横縞に織り込んだりして、先端の房状に開く部分は飾りとして美しいものである。

(文責 堀内 勝)



図1 アラブの鷹道具(1)
最下段 足革(sibāq)と経緒(murshil, murbit)
経緒の先端の輪(図右下)は架(Wakr, 図左上方より左下方に伸びるT字形のもの)の下部に結ばれる。中央左は眼套(burqu'ah), 上は鞆(タカタスキ, manqarah)。
M.Allen 著 Falconry in Arabia p.75 より

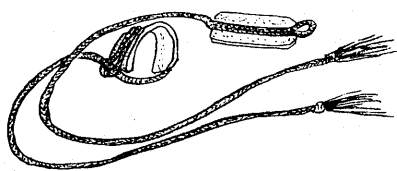


図2

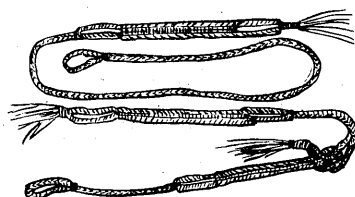


図3

図2 アラブの鷹道具(2)
足革 sibāqシバーク
全長 33 cm 革部分 5 cm
房 4 cm
色 紐 黄色, 革 薄茶色
材 紐 絹, 牛 革

図3 アラブの鷹道具(3)
経緒 murshil, murbit
上 64 cm, 下 47.5 cm(結び目まで上 26.5, 下 21 cm)
材 絹, 色 黄色

① 打をろしてリウチ降ろして 捉

らえて里に運び下ろして。〔参考、鷹を山から捕ってくる方法は二つある。一つは「巢鷹」と言つて、まだ尾羽の中心に斑が二つあるだけの幼鳥を鷹の巢から盗み出してくる方法で、今一つは「網掛(あが)け」と言つて、高さ二メートル横四メートルほどの大きな網を張り鳩などをバタつかせ、鷹が餌を探りに来たところで網を伏せて捕獲する方法である。ここでは「網掛け」で捉らえた鷹を山から降ろすことを言っているのである。〕

② 据立申事 スエタテ モウス

コト 手に据え立てること。手に止まらせること。〔参考、野性の鷹の扱いは注意深く手早くしないと、死ぬ、逃げる、怪我をするなどトラブルが起きる。そのため山から降ろす時は、目隠しをし、体を「伏せ布(ぎぬ)」でくるむのである。〕「据立」が出来れば調教の半分は終わったとも言え、鷹匠仲間では「一据え、二据え、三、四が無くて五に据え」と言われているくらいである。「伏せ布」は「鷹にさせ寒さを防ぎ或は荒鷹は拳にゐがたき故これをきせてねさす。」(放、六八五頁)

③ 鷹なつけ様の事

一 鷹を先山より打をろして参候時、其俣据立申事悪し。

④ 頓て足革を差ていかにも聞き鳥屋に繋、二三日

ほと休て、其日に餌押餌喰を能見合てから据

立可申事。

一 なつけ様の事ハ能口餌を二三ッ程拵て懷中ニ入

温て鳥屋の口をいかにも静に明て右の口餌を持て

⑤ ねつ鳴をして据に依へし。据出して朝日の指込

座敷の内に日を請て据廻しいかにも和らかに当るへし。

扱又鷹の機嫌能時分を見合て右の口餌を二三度に

雀一ッ半斗程胸に持程の積りを喰せて五ッ時分まで

据廻し頓て鳥屋に繋へし。

④ 鷹を人に馴れさせるやり方のこと

一、網掛けで捉った鷹をまず山から降ろしてくる時、そのまま手に止まらせることは悪いやり方である。すぐに足革を嵌めて、いかにも聞き鳥屋に繋ぐこと。二、三日ほど鷹を休ませてから、その日に餌の消化具合や食欲が良いかどうかをよく見きわめてから拳に据えるべきである。

一、人に馴れさせるやり方のこと。

まず良い口餌を二つ三つほど拵えて懷ろに入れ温める。鳥屋の入口をいかにも静かに開けて、懷ろの口餌を持つて、チュツチュツチュツと言いながら、手に止まらせるために近寄っていくべきである。拳に止まらせて、鳥屋から据え出したら、朝日の指し込む座敷の内、日を請けて据え廻し、いかにも和やかに鷹に対応するとよい。さて、また鷹の機嫌の良い頃合いを見はからつて、懷ろの温い口餌を二、三度に雀一ッ半ほどの分量、腹持ちのいいほどの餌積りで食わせる。午前八時頃まで屋外を据え廻して、そのまますぐに鳥屋に繋ぐとよい。

一、夜据えの段階では、午後六時頃から鷹を拳に据えて連れ出すこと。夜据えをしている途中で口餌をやつ

- ③ 頓てⅡヤガて、すぐに
④ 足革を差てⅡアシカワをサシて足革を付けて。足革は足緒とも〔参考、「足緒差す」Ⅱ「鷹に足革を嵌める」(放、六二八頁) 図4、5を参照
⑤ 餌押餌喰Ⅱエオシ エグイ 餌を胸に止めていけるか、よく消化しているか。又、餌の食いつぶりは良いか、悪いか。〔参考、「餌押」は「餌をとめること」(放、六三四頁)
⑥ ねつ鳴Ⅱネツナキ 鼠の鳴き声をまねる。こうして餌が近くにあることを鷹に分らせる。「唯又囁。鼠の如き聲にて鳴く。」(放、六七六頁)
⑦ 朝日の指込座敷Ⅱアサヒのサシコム ザシキ 鷹を、人慣れさせるために、屋外に出す前に、落ち着いた座敷の中で据え廻してみるのである。
⑧ 据廻シ スエマワシ この表現は普通には夜据から始まる野外での調教を指すが、ここではそれ以前の屋敷内での人慣れ訓練を指す。
⑨ 当るへしⅡアタるべし 鷹に対応するべきである。
⑩ 雀一ツ半斗Ⅱスズメ ヒトツハン バカリ 雀にして一つ半くらい。鷹の餌の分量は雀が単位である。「ひよどり」なら「雀四つ」、「土鳩」なら「雀七ツ半」になる。
⑪ 胸に持程のⅡムネにモツホドの胸(胃袋)に貯まる程の。雀一つだとすぐ胃で消化されてし

一夜据の時分ハ宵の六ッ過よりも鷹を据出シ夜据の

内に口餌を飼へからず。胸に餌を持過たると思ハ、羽

節を切て身を喰ぬ様に毛をひかすへし。胸に餌を

少持せて繋へし。餌を持さる鷹を夜据する事悪し。

殊に仕草臥たる鷹を夜更る迄据る事猶以悪。

荒鷹杯も夜据ハさしてたりにならず。昼据廻専也。

一野据の時分ハ家の内にてよく据廻シ見る内に多念も

なしと見付たる時、大緒たけにておきたて、見るに、余

念なく拳に参ると見付たる時分に、野据に出へし。家の

内にていか程なつきたる鷹成共、野に出て必心替る也。

其時いかにも鷹に念頃に当りて和らかにあつかひ

て見る内に鷹の心も和らき、能見付たると見る事

有へし。其時頓て能口餌を飼て日数を送り野を据廻シ

てはいけない。腹に朝餌が消化されずに残り過ぎている。と思うならば、鳩などの羽つきの片胸を切つて与え、肉を食べないで羽を引き千切らせるようにするといふ。腹に少し餌が残っている状態で繋ぐといふ。空腹の鷹を夜据する事はよくない。殊に、仕草臥れた鷹を夜更けまで据える事は、ますます悪いことである。荒鷹なども夜据はあまり足しにならない。昼に据廻ることが専ら大切なことなのである。

一、鷹を屋外に出す野据えの頃合いは、家の内で、よく据え廻して見るうちに、人に馴れて逃げようという気持ちが無くなったと見えた時である。大緒だけを付けて、鷹が鷹匠の拳に乗って来るか見るに、逃げようとする気持ちなど無く拳に来ると見えた時分に野据えに出すべきである。家の中で、いかに懐いているように見える鷹であっても、野に出ると必ず心が野性に帰るものである。其の時、いかにも懇ろに鷹に應對して、鷹の心を荒立てないようにならば扱って様子を見るうちに、鷹の心も和らぎ鷹匠の方へ心が落ちついたと見えることが有るはずである。其の時すぐに良い口餌を与えて日数を送り、(あわてて招き立ての訓練をしようなどと思わず) 毎日野を据え廻す

まう。沢山食わせると胸が膨れて視認できる。食べた物が胸に残っているかは触診できる。

⑫五ツ時分Ⅱイツツジブン「五つ」は八時である。ここでは午前八時頃。

⑬宵の六ツ過Ⅱヨイのムツスギ午後六時過ぎ頃。「暮六つ」とも。

⑭羽節Ⅱハブシ鳩などの羽根つきの片胸。片翼。「羽茎(ハグキ)」とも。(参考、「羽節酒」といって、雉の羽節の肉を入れ、少量の塩を混ぜた酒を通は好んだ。)⑮引かす 引き千切るようにして食べさせる。

⑯胸に餌を少持せてⅡムネにエをスコシモタせて少し腹持ちがいいようにさせて。(参考、羽節を引かすのは、消化の悪い羽を食わせ、肉は少ししか食わせずに満足させるのである。こうした「羽節」を使うやり方は、隼(ハヤブサ)を仕込む時によく取られる方法で、大鷹は人になかなか慣れないので普通は出来ない。)

⑰餌を持さる鷹 餌を腹に持っていない鷹。餌を食べていない鷹。空腹の鷹。

⑱草臥たるⅡクタビレたる 疲労し根気の無くなった

⑲た(足)りにならず たしにならない。ためにならない。有益ではない。

⑳多念もなしⅡタネもなし 逃げようという気持ちが無い。いろいろ考えて、おどおどしたり

其時鷹の合点も不参人は近く置立たかる物也。

其時心長くこらへて据廻ル内に能時分を見出す

事有へし。其時頓て大緒たけにて置立て見るに

多念もなく拳に参ると見付るにおゐてハ一二日程

間を置て又をき立る也。遠く置たつ事悪き事也。

近く置立ても遠く置立ても同前也。

一鷹を置立るに高き所に鷹を置、我身ひきき所に

居事悪し。何時も鷹をひきき所に置、高き所より

置取へし。荒鷹置立るに細き経緒ハ悪し。当とき

経緒をさして置立、後にハ次第に細き経緒にて置へし。

一鷹のもかたし成事ハ鷹匠次第也。鷹を仕ひはな

してよりいかにもうちやかに能わたりて参たる時ハ何

のである。其の時、鷹のことをよく分かつていない人は、日時を置かず、しょっちゅう間近に招き立ての訓練をしたがるものである。其の時、焦る心を押さえて据え廻すならば、その内に良い頃合いを見出す事あるだろう。其の時、すぐに大緒だけを付けて招き立てて様子を見ると、逃げた気配もなく拳に舞い戻って来る様であったなら、(その時はじめて)一、二日ほど間を置いては、また招き立てる練習をさせるのである。ここで日時を開けてしまうのは悪いことである。招き立ての訓練は、間近くても間遠くても同じように駄目なのである。

一、鷹を招き据えるのに、高い所に鷹を置き鷹匠が低い所に居るのは悪い。何時も鷹を低い所に置いて、我身が高い所から招き取るべきである。まだ十分馴れていない鷹を拳に取る時に細い経緒を使うのは悪い。太い経緒を差して招き立て、訓練が進んだ後に次第に細い経緒で招き立てるようにするのである。

一、鷹が言うことを聞かなくなるのは鷹匠次第である。鷹を仕い放してから、いかにも穏やかによく飛び渡ってそのまゝ戻って来る時(即ち、渡りはあっても獵欲の無い時)は、

びくびくしたりするようなことが無い。

②① 大緒^①オオオオ「忍^②(お)き縄」、「招^③(お)き縄」、「置き縄」の類で特に装飾的な組糸の紐。鷹の附蹠(はぎ^④趾の上部)に装着する足革に接続させて架に止まらせたり、据廻す時に用いる紐緒。二、五メートルの長さで、飾りも兼ねて色目良く製したもの。鷹が逃げたり、高い木などに止まって戻って来ない時この縄がついていと引き戻せる。「絹製、朱色、長さ十二尺、中央に柔皮を付し、環をつけ、柔皮の紐を取りつく、中央より折れて二本とし両端に朱房を附す。」(放、三六九頁)

②② おきたて^⑤招^⑥(置)き立て ある距離から餌を見せて拳に呼び戻して。拳に招き寄せて。(参考、「ヲキ・トル 招き取る。鷹に餌を見せて拳にかへらす。ヲギ・エ 招餌。鷹を拳上に呼返す為の餌。呼餌、雉をよしとす。忍餌とも書く。」(放、六三六頁)心替る^⑦ココロ カワる 「野がえり」、「山恋い」の心になる。野性に戻る。

②③ 念頃^⑧ネンゴ 懇ろ。

②④ 不^⑨参人^⑩マイラザル ヒト (合点の) いかない人。

②⑤ 置立た^⑪がる^⑫オキタテたがる 招き立てる訓練をしたがる。注

②⑥ 参照。

②⑦ 大緒^⑬たけ^⑭オオオオだけ 鷹を仕込む段階には、さまざまの長さの招き(忍き・置き)縄を使う。

程容度鳥有共そこを能々こらへていかにも能餌を

拵て頓て其所を立さらすに餌を飼へし。此当かひを四

五度斗仕るにおゐてハもかたき鷹有へからす。能々

口伝を受へし。

一片^⑮入成鷹の置渡りもなきを取飼へからす。鷹の

合点不参人は早く取飼たるを手柄の様に申候。是ハ一

祝に鷹の合点不参人のわさ也。先第一鷹と云物は

鳥を取らぬハ飢^⑯死物と心得へし。片入成鷹取飼色々

様々有。先次第^⑰くにもかたく成、後迄置渡り少もなく

して鳥をも次第に取をとり命も短く逸物する事

難し。上手ハ鷹を^⑱うらやかに遣ひなし、置渡りも^⑲

やすく仕^⑳なし逸物さするを上手ト云

どれほど狩らせたい鳥が居ても、そこをよくこらえること。そしていかにも良い餌を拵えて、すぐにそこを立ち去らないで(鷹がその場に慣れて、そこを自分の狩り場だと思いうに)餌を与えるべきである。この当てがいで四、五度はかり遣う内には、言うことを聞かないような鷹は無くなるだろう。よくよく口伝を受けるべきである。

一、片鳥屋の鷹で喚渡りも無い鷹に獲物を取らせるべきではない。鷹についてよく分かっている人(手順通りの調教を省略して)早く獲物を取ったことを手柄のように言うものである。しかし一般に鷹のことが分かっていない人のすることである。まず第一に鷹というものは食糧としての鳥を取らなければ飢えて死んでしまう物であると気付くべきである。片鳥屋の鷹の取らせ方はいろいろ有る。(しかし、先の様なやり方をしていたのでは)まず次第次第に言うことを聞かなくなり、後まで鷹匠の指示で飛び戻って来るということも少しもなく、自分の食糧としての鳥もだんだん捕る意欲が無くなり、狩る鷹としての寿命も短く、とても逸物にすることは難しい。(若い時に一度調教した鷹であっても喚渡りをしつかりやるのが大切で、獲

大鷹は体型が大きいため罾す時の守備範囲が狭く、三十メートル程度の招き縄（二十間、三十間のもの左縫りの縄）を使うが、隼のような小型で敏捷な鷹は獲物に対する守備範囲も広く、その調教には右縫り百メートル以上もの長い招き縄を付けて放つ時もあるのである。ここではそういった実猟向きの長い招き縄は使わず、大緒だけを使って、近距離での呼び招きを試みているのである。注②参照。

②⑧ 一二日程イイチ ニニチ ホド 一日から二日程度。招き立ての調教は間の開け方がポイントであり、これより間があきすぎても、つまりすぎても悪いことが以下に述べられる。

②⑨ ひきき所 低い所。鷹はより高い所に止まりたがる性向があり、拳に据える時も拳を鷹の止まっている位置より高くおくと招き立てることが容易である。調教の初期は鷹匠が低い所に居ることはまずいのである。

③⑩ 経緒ハヘオ 繻とも繻とも攀とも当てる。鷹の足に装着する緒。鷹を飛ばせる時には、これを足革に接続させる。注②①・②⑦参照。
〔参考〕「ヘ・ヲ 鷹の脚に着く緒。これをつけることを特にさすといふ。長さ二十一尋十五尋七尋……」（放、六八六頁）「ヘ・ヲ・タカ 小鷹。経緒を着くるは多くは小鷹なるより然か用ゐる」（放、六八六頁）

③⑪ 当とき 「布とき」の誤写か。

一鷹の上手と云ハ悪敷鷹に逸物させ曲鷹を仕ひな

をし、もかたきをも安く仕ひなすを以上手と云也。又能

鷹を悪敷仕ひなし曲をさせ、捉へき鳥をもとらざる様

に遣ひなす事曲事也。惣別鷹ハ心深き物成に依て

少の曲も直り難き物也。能分別して我心と鷹の心

を引合仕ふにおゐてハ逸物する事疑なし。

口伝を能々相伝すへし。

右之七ヶ条ハ我等習覚之通書載申者也。

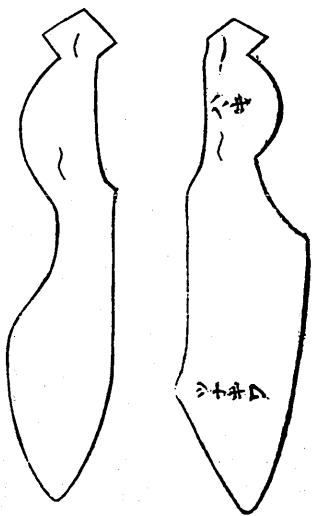


図4 伝統的足革(鷹経辦疑論より)
ツナキワをハバキの両目に渡す。両目の間に鷹の跗蹠が入る。図2の足革と比較されたい。

物に罾わせるのはその後でなければならぬ。上手な鷹匠というのは、鷹を穏やかに遣い、招き渡りも全く簡単に鷹を仕ひ、逸物にするのを言うのである。

一、鷹の遣い方の上手な人というのは、良くない鷹を逸物にさせ、癖のある鷹を仕ひ直し、従順でない鷹を簡単に遣いこなしてしまうのを以て、上手と言うのである。また、能力のある鷹を悪く遣い悪い癖を付けさせてしまい、捉るはずの鳥さえ捉らないように遣ってしまうのは良くないことである。大体、鷹は心深いものであるから、少しの癖も直り難いものである。よく分別して、自分の心と鷹の心を見合わせ考えて遣えば、鷹が逸物となることは疑ひの無いことである。口伝をよくよく伝え合うべきである。

右の七ヶ条は我等が習い覚えた通りに書き載せたものである。

- ③②もかたし 最難し。従順でない。言うことを聞かない。「もやすし」の反意語。ここは「もかたし」の誤写か。
- ③③うちやかに「うらやかに」の誤写か。穏やかに。注④③参照。
- ③④畚度鳥Ⅱアワセ タキ トリ 鷹に捉らせた鳥。狩りをさせるのに丁度よい鳥。
- ③⑤もかたき 最難き。言うことをきかない。意固地な。注③②参照。「最」は接頭辞、「まこと」「正しい」「もつとも」の意を表す。
- ③⑥片入Ⅱカタイリ 片鳥屋の鷹。鷹狩りに使われ始めて二年目に入る鷹。「しかとつかひ入れぬ鷹」(放、六四二頁)
- ③⑦置渡りⅡオキワタリ 「喚渡」(放、六三六頁)とも。注②②参照。
- ③⑧取飼Ⅱトリカウ ここでは餌肉となる鳥を生きたまま与え、捕らえ食べさせる。半ば実獵と同じ。
- ③⑨早く 手順通りの調教をせず
- ④①一祝に 「一般に」の誤写か。
- ④②鳥 獲物となる鳥。一般に「鷹の鳥」という。
- ④③取をとり 取り劣り。取ることが下手で、また少なくなり。鷹が勝手に取るか取らぬか判断をし。
- ④④うらやかに 注③③参照。
- ④⑤もやすく 注③③参照。
- ④⑥曲鷹Ⅱクセタカ 素直でない、癖のある鷹。
- ④⑦引合仕ふⅡヒキアワセ ツカウ

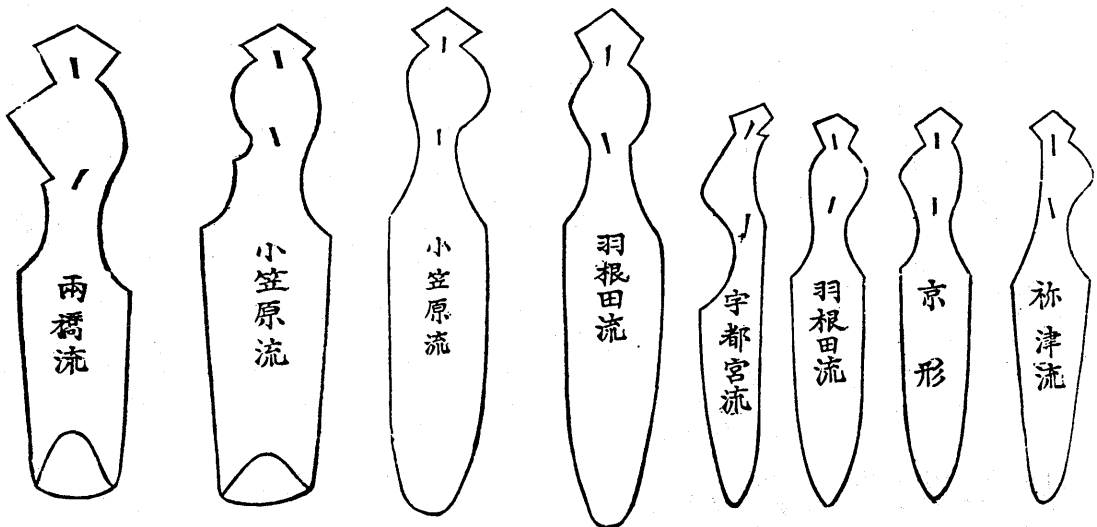


図5 各流派の大鷹・小鷹の足革の製し方・寸法(同上書より)

見合せて鷹を遣う

④7 この図節は八ヶ条ある。内容からして最後の条は、特別なことは言っていないので、独立した条とみなす必要はなからう。

④8 習覚之通ニナライ オボエノトオリ 習い覚えた通りに。

① 鳥屋出ニトヤグシ 換羽のため

鳥屋に入れておいた鷹を、換羽を終了し、狩り用に調教に入るため鳥屋から出すこと。八月下旬が鳥屋出しの時期である。換羽の際、尾羽は鈴付けから抜け、最後に真中が抜けかわる。新しい尾羽は毎日一センチほどの速度で伸び、九月には調教が本格的になるのである。

② 鶴取ニツルトリ 鶴専用にとらせる鷹。

③ 雁捉ニガントリ 雁専用にとらせる鷹。『雁取の鷹』（放、六四四頁）

④ 開き鳥屋ニクラキトヤ 水舟の蓋をし、風窓を閉め、二重扉にしたなど、外部から絶対に光線の入らないようにした鳥屋。〔参考、放、三四五頁〕

⑤ 架をひかせニホコをひかせ 架に繋いだままにし。

⑥ 無利にニムリに 無理に。

⑦ 餌 「飼」の誤写。

⑧ 犬ニイヌ 食用犬。古く犬は我が国でも食用とされた。ここでは鷹用の食用犬。

⑨ ちまき （足の）筋肉のこと。すじ肉は粽・茅巻状になってい

③3 ① 鳥屋出の鷹相しらひ取飼様心得口伝之事

一 鶴取雁捉の鷹鳥屋を出し先聞き鳥屋に繋五

六日の間架をひかせ、其後人遠き座敷の内杯据立へし。

扱四五日も餌を喰ぬ事有へし。其時無利に餌を餌事惡し。

鷹の機嫌次第に飼べし。家の内にて据る内にハ犬のちまき

肉にいかにもこわき所を餌つとに入引せたるかよし。扱又

⑩ 大形鷹入たる時分に能口餌を拵て朝疾束しらみ

より据廻し、朝据を五ツ時分まで朝日の当る所にて据

廻し、其内に右の口餌を日の出時分に飼。此餌ハ雀一ツ斗

程の餌積りをして飼へし。右の如く相しらハすして

きりめく鷹を無理に据立ればあやまちするか煩も

③ 鳥屋から出したばかりの鷹の対応及び餌飼いの仕方についての心得、口伝のこと

一、鶴取り用の鷹や雁取り用の鷹を換羽期を終えて鳥屋から出す時は、まず暗闇にした鳥屋で五、六日のあいだ架に繋いでおく。其の後、人氣の無い座敷の中などで拳に据えてみるべきである。さて、四、五日も餌を食べないこともあるだろう。そんな時、無理に餌をやることは悪い。鷹の機嫌次第に餌をやるべきである。家の中で拳に据え馴らす時には、満腹するような良質な餌でなく、犬の足の筋肉でいかにも堅い所を、食べにくいように餌ずとに入れて、藁の間から引き出させるように餌飼いをするのが良いのである。さて、また大方の鷹は、獵欲の出た時分に、良い口餌を拵えて、朝早く東が白んできるときから据え廻す。朝据えを朝八時頃まで朝日の当る所で据え廻し、その内に良い口餌を日の出頃に食わせるのであるが、この餌は分量とし

ることから。

⑩こわき所 硬い部分。

⑪餌つとゝエずと 「餌苴、藁の衣を去り青糸にて六所あむ泊り山に用ゐる。」(放、六三五頁)

⑫大形〓オオカタ 大方。ほぼ。

大概。だいたい。

⑬入たる〓イレたる 獵欲の出ている。餌を食べるようになる。

⑭疾〓トク 早く

⑮五ツ時分 朝八時。⑮注⑯参照

⑯きりめく キリキリと嫌がつて鳴く。又は、我慢の限界(きり)がきたように見える。

⑰野据〓ノズエ 野外を鷹匠の拳に鷹を止まらせて連れ廻すこと。

〔参考、「内据え」といって、屋敷・庭など鷹を驚かせるものの少ない所で十分外気に慣れさせてから野据えに移行することが大切で、鷹を脅えさせてしまったり、逃げ出したくさせてしまったりしては猫に使え鷹にならない。屋外へ据え出す時も、「軒据え」から「町据え」へと、日頃見慣れた風景から次第に刺激の多い野外へと慣らせていくのである。〕

⑱取飼〓トリカウ 餌飼いの方法の一つ。実際に獲物を捉えさせて食べさせる、実猫に近い形の餌の与え方。⑮注⑳参照。

⑲五ツ〓イツツ 朝八時。⑲〓⑳は(四)図表1「古時刻の図」参照。

⑳四ツ〓ヨツ 朝十時。

㉑七ツ〓ナナツ 夕方四時。

㉒五ツ〓イツツ 夜八時。

㉓胸に持すハ〓ムネにモタズバ

出るか逸物の鷹も二物に成、悪ク曲も付もの也。鳥屋出ハむり成仕掛ハ何鷹によらす悪し。能々分別有へし。

一野据の時分ハ如右仕掛けて一日か二日程野据仕候ハ、取飼

へきと思ふ時分ハ朝夜を込て野据に五ツ過四ツ前迄

据廻してはや帰へきと思ふ時分に得と餌を飼して帰り

鷹を鳥屋に繋休て置、晩の七ツ時分に据出し、日の入を

相図に鳥屋に繋き、夜に入五ツ時分に据出して夜据

をし、朝飼たる餌胸に持すハ、一時斗程置て火を見せ

て繋へし。又胸に餌を持候ハ、一ツか半分ニ成程迄据、

少胸に餌をもたせ繋く也。野据過たるハ悪し。然るに

依て内にて久敷日数を込て、野据の時、日数を不据。

頓て取飼如に仕掛たるかよし。三日より過たるハ悪し。

能々分別して据立へし。心持口伝有。

ては雀一羽分ほどのつもりで飼うべきである。右のように、夜据えから朝据えへの行程を踏まずに、嫌がつて鳴く鷹を無理やり据え立てると、失敗をするか煩いが出るかして、逸物の鷹も二流になり、悪い癖も付くものである。鳥屋出しは無理な仕方である。鳥屋出しは無理な仕方である。鳥屋出しは無理な仕方である。よくよく考えて行うべきである。

一、野据えの段階は、右に述べたやり方で一日か二日ほど野据えをしたならば、実猫に近い取つて食べさせるやり方で餌をやるべきだと思ふ時は、朝夜を通して説明すると次のようにするのが良い。まず野据えに朝八時過ぎから十時頃まで据え廻し、そろそろ帰るべきだと思ふ時にじつくりと餌をやつて帰り、鷹を鳥屋に休めて置く。晩の四時頃に据え出し、日の入りを相図に鳥屋に繋ぎ、夜に入り八時頃にまた据え出し夜据えをする。この時、朝やつた餌が胃袋に残っていないければ、二時間ほどしてからロウソクの火を見せて架に繋ぐとよい。また消化不良を起こして餌が胸に残っている鷹は、その分量が雀にして一羽か半羽ほどになるまで据え廻し、少し胸に餌をもたせた状態で架に繋ぐのである。野据えが過ぎるのはまずい。だから内据えに日

手で鷹の胸に触れて、胃袋に食べ物が残っていない場合には、²⁴火を見せて、ロウソクの火を見せて。「参考、灯火で取飼う「ボゴシ」にかかわる調教か。放(三五二頁)。「ボゴシ」の項参照。」

²⁵一ツか半分。胃袋の中の量のこと。雀にして一羽か半羽ほど、ほんのわずか胃に消化しきれない食物が残留している分量。

²⁶内二ウチ 屋敷の中。

²⁷久敷日数を込て二ヒサシクヒカズをコメて 十分長い日数をかけて

²⁸不レ据二スエズ 据え立てない。野据えには、それほど日数をとらない方がよい。

²⁹鴨にても鳥にても二カモにてもカラスにても 鳩でも何でも良い、鷹の生体維持のためにも、入れを保つためにも、餌となる鳥を捕らせて食べさせるのである。

³⁰肉当掛二シシアテカケ その時食べさせる量を、翌日の予定を見越して与える。「肉の當様」は「日を限りて餌飼の分量をきめて鷹に与ふること」(放、六五六頁)

³¹日二ヒ その日。

³²上飼 上餌(ウワエ)の誤写か。調整餌。余分に与える餌。

³³鶴鳥 鶴雁の誤写か。大物捕り用の鷹について述べているのである。

³⁴二日三日四五日も間を置二フツカミカ シゴニチもマをオキ 実獵に近い「取飼」をしない

一如右之据立取飼の事ハ鶴取雁取の鷹ならば

鴨にても鳥にても一日に一ツ宛三日四日程宛取飼候ハ、又

五日も六日も生物をとらせずに野を据廻り最早能時分

と見付るニおるてハ頓て肉拵をして肉当掛申候日、鴨

成共又は鳥成共取飼して飼口三ツ四ツ程喰せて其

日の上飼より当掛可申候。鶴鳥まで取候鷹成共、鳥

屋出ニ五日六日共続て取飼たるハ悪し。何レの鷹成共

二日三日四五日も間を置ニして仕たるかよし。続て取飼ハ

逸物鷹も二物に成物也。能々前後を分別して仕ふへし。

数をかけてしつかり調教し、野据えには日数をかけず、すぐに捕獲して食べさせるやり方にするのが良い。野据えは三日以上になるのは良くない。(鷹が実獵の意欲を失ってしまうからである。)よくよく考えて、うまく据え立てるべきである。その心持ちについては口伝がある。

一、右の様に据立て取り飼うやり方のことは、鶴取用・雁取用の鷹ならば鴨でも鳥でも何んな鳥でもよい。一日に一羽あて、三日四日取らせて食べさせ、次に五日も六日も生きた鳥は取らせずに野を据え廻る。もう良い頃だと見えた時に、すぐに肉づきの調整をして、翌日の実獵を踏まえた分量の餌を与えるその日、鴨でも鳥でも捕らせて食べさせ、その分量は雀にして三羽か四羽分であるが、その日の上餌を与える時から、このような翌日を見越した餌のやり方をするのである。鶴・雁まで取ったことのある、よく仕込まれた鷹であっても、換羽期を終えて鳥屋から出したばかりの鷹に五日六日と続けて取らせて食べさせる餌のやり方をするのは悪い。どんな鷹であつても二日、三日、四、五日とそれぞれに合う間を開けて仕うのが良い。続けて取って食べさせるようなことをすれば、逸物の鷹も二流品になってしまうの

で体調を整えるのである。空詰(カラツ)め。

- ① 経緒指^①ヘオ サス 「経緒」は②注②・②⑦・③⑩参照。経緒を着けることを特に「指す」「差す」と言う。
- ② 荒鷹^②アラタカ 「とりて未だ馴らさぬ鷹」(放、六三〇頁)
- ③ 大緒の先^③オオオオのサキ 大緒繫(オオオクルミ)と呼ばれる華粧革の先きに。「大緒」は②参照。馬上も鷹にとっては刺激の強い場所であり、当然、逃亡防止の経緒が必要であるが、馬上の勇姿を飾るため、大緒を装着する時の華粧革に通して経緒を差すのである。
- ④ 森村 森林の誤写か。森や林。
- ⑤ 二寄も三寄も^⑤フタヨセもミヨセも 二寄せも三寄せも
- ⑥ さ(差)しと(解)くへし 経緒を付けた、はずしたりするべきである。
- ⑦ 常之 常々の「タ」に書写の折汚れが付いたものと思われる。つねづね。
- ⑧ 曲相^⑧クセソウ 癖の様子。癖筋。性格。
- ⑨ 不断捉付さる鳥^⑨フダントリ ツケさるトリ 鷹の狩る獲物としては、普通は襲わせない鳥。
- ⑩ 珍敷^⑩メズラシキ 襲ったことの無い珍しい鳥。
- ⑪ を「也」の誤写か。又は、以下に「言ふべし」「心得べし」「知るべし」などの脱文が有るか。
- ⑫ 押へ除^⑫オサエ ヨケ 獲物を

③④ 鷹に経緒指口伝之事

① 荒鷹取飼候^①ハいかにかに能なつけたる鷹成共、経緒差て可習。

② 一夜道を据申鷹ハ何時も経緒を差て据可申事。

③ 馬上にて鷹据候時ハ大緒の先に経緒を可差。

④ 高き木の下、森村の際杯にて仕ひ候時、是何時も経緒差可申候。

差可申候。

⑤ 広き野、高き山の下杯にてハ、常にウララカ成鷹成共

⑥ 経緒を差へし。広野、高き山の下にてハ、必鷹のこ、ろ

⑦ 違ふ物成に依て、先^⑦二寄も三寄も経緒を差て鷹の

⑧ 心を見付てさしとくへし。

⑨ 一常之雁杯を能取候鷹の、曲相も能、生物を見ても

である。よくよく前後を考えて仕うべきである。

③④ 鷹に経緒を指すやり方の口伝のこと

一、捕獲して未だ調教が出来ていない鷹に取らせて飼おうとする時は、いかによく懐けてある鷹であつても、経緒なしで飛ばせてはいけない。経緒を差してから獲物に習わせるべきである。

一、夜道を据え歩く時の鷹には何時も経緒を付けるべきである。

一、馬上で鷹を拳に据える時は大緒繫の先に経緒を差すといふ。

一、高い木の下や、森・林の際などで鷹を仕う時は、鷹が高い所へ逃げたがる性質を持っていることを考えて、何時も経緒を差すべきである。

一、広い野原や高い山の下などでは、いつもはうららかにしている鷹であつても、経緒を付けるべきである。広い野原や高い山の下では、鷹の心は常とは違って野性に返るものであるから、まず二度三度と経緒を付けて獲物に向かわせてみて、鷹の様子を見てから、経緒を差したままにし

捕るとき、押さえ込もうとしな
いか押え込むのが下手で、取り
逃がしたりすること。

⑬廿尋斗ニジユウ ヒロ バカ
リ 一尋(ヒト ヒロ)は人間
が両手を横へ伸ばした長さであ
る。従って二十尋はおよそ三十
六メートル。

⑭忍縄ニオキナワ 置縄とも書く。
調教の最終段階で、飛ばせる時、
逃げ去らないように鷹の足革に
結ぶ長い絹製の細い紐。長いの
は五十メートルもある。「置
縄。大鷹の足緒。長さ四十尋、
三十三尋等。左振にす。」(放、
六三六頁) ⑮注⑳・㉑・㉒参照。
⑮まとひて「惑ひて」でなく「纏
ひて」であろう。

ほしかる鷹成共、不斷捉さる鳥の珍敷を吞へき

と思ふ心あらハ、先経緒をさして吞すへし。心もち

に口伝有。雁鷹に経緒を差ハ加様成儀を

一鶴雁取にても押へ除をする鷹ハ長サ廿尋斗の

⑮忍縄さして吞すへし。鶴雁にても忍縄にまとひて

狂ヒ候鷹、おつる鷹有へし。其時の相しらひに色々口伝

有。悪敷相しらへハこる、物也。取飼様口伝心持有り。

右七ヶ条経緒之拵様有。口伝あり。

ておくか、はずすかを決めるべきで
ある。

一、常々、雁など大物をよく取る鷹
で、調教もよく出来ていて悪い癖も
無い筋の良い鷹で活鳥を見れば獵
欲を見せる調整も出来ている鷹であ
っても、普段、獲物として襲わせた
ことのない珍らしい鳥を取らせよう
と思う気持ちがある鷹匠にある時は、ま
ず経緒を付けて飛ばすべきである。
その心持ちに口伝がある。雁取り用
の鷹のような優秀な鷹にも経緒を付
けることがあるのは、こういうこと
なのである。

一、鶴・雁取り用の鷹であっても、
獲物を取る時、押さえ込むのが下手
で取り逃すことのある鷹は、長さ三
十六メートルほどの忍き縄を付けて
獲物に向けて飛ばすといふ。鶴・雁
用の鷹であっても、逃亡防止用の忍
き縄が纏い付いてあばれ狂ったり、
落ちたりする鷹もあるだろう。そん
な時の対応の仕方にはいろいろ口伝
がある。悪いあしらいをしてしま
うと鷹は狩ることを嫌がってしまう
のである。その時の取らせて食べさ
せる餌のやり方には口伝があり、特
別な心配りもある。

右の七ヶ条は経緒の扱い方で口

- ① 定規^①シヨウキ 定木とも。鷹狩りの実戦まで、また実戦の間の鷹の肉相(シシアイ)の丁度よい状態。筋肉の付き方、餌の食べ方などの定まった状態。
- ② 切懸^②キツカケ 定規を見定めるきつかけ。
- ③ 何ッも^③イツも 何時も。常日頃。不断。
- ④ 肉のひけたる鷹^④シシの退けたるタカ 疲れて肉の張りが無くなっている鷹。ここでは前行の肉前時(肉の調整が定規まで今一步手前の時)の鷹と対になっている。定規の正にその時をきつかけとして習せることが大切で、その前でも後でも悪いのである。

① 雁鷹^①ガシタカ 雁取り用の鷹。鷹に鈴を付けて狩らせるのは、一般的には鵠・雉子鰯であるが、ここでは特に雁取りに鈴を付け

㊦^①定規切^②懸之事

一定木と申ハ不断物を取付たる鷹の肉相の事也。きつ

懸とハ何ッも物を取付たるよりも肉前時答する事

悪し。又肉弱^④成肉のひけたる鷹を答する事悪し。

此切懸を能々分別して仕ふにおゐてハ逸物する事

疑有へからず。心持口伝有。

㊦^①雁鷹^②に鈴を差と云事

一雁鷹に鈴を差と云事ハ何もの切懸の如に肉相も

能成たると見付候へ共、鷹の心もさへすして生物を見

てもほしかる心もなく身の毛をつめて鷹の様子

何日^⑥に替りたると思ふ時、不審^⑦を立、鈴を差て答

伝がある。

㊦ 鷹を狩に使うのに丁度よい筋肉のつき具合である定規を見定める切つ懸けのこと

一、定規と言うのは、普段、獲物を取らせるのに丁度よい鷹の筋肉の出来具合のことである。定規を見定める切つ懸けは、何時も獲物を取る時よりも肉の詰めがまだ出来ていない時に答せるのは悪く、又、疲れて肉に力が無くなり、肉が退けた時も答わせることは悪い。(その様な時は、切つ懸けにならないのである。)此の定規を見定める切つ懸けをよくよく考えて鷹を遣うならば、逸物となる事疑い無いだろう。やり方の心持ちには口伝がある。

㊦ 雁取り用の鷹に鈴を付けるといふこと

一、雁取り用の鷹に鈴を付けるとい

た方が良い場合に言及するのである。

- ② 鈴を差^⑧スズをサス 鈴を付ける。鈴は尾羽十二枚の真中の羽（この羽を鈴付（スズツケ）・鈴持（スズモチ）・鈴掛（スズカケ）という）に鈴板（スズイタ）又名を鈴敷（スズシキ）とも言う鈴を支える板と共に装着する。どこかへ行ってしまったり、見えない所に降り立ったりした場合、鈴の音で所在が分かる。
- ③ 何もの^⑧イツもの ここでは②の「定規の」にあたる。
- ④ さへすして 冴えずに。明瞭でなく。はつきりせず。
- ⑤ 身の毛をつ（詰）め 羽を寄せて縮こまり。
- ⑥ 何日^⑧イツノヒ 何時もの日。常の日。
- ⑦ 不審を立^⑧フシンをタテ 不安に思つて。鷹の健康状態が良くないかと心配して。
- ⑧ 又一ツには^⑧マタ ヒトツには一ツは、上手に狩れずに取り逃がしや深追いなどによつて見失なう不安であり、又一つとは、鷹匠の支配下にあることを忘れ、野性に戻って逃げることへの不安である。
- ⑨ 加様の時^⑧カヨウのトキ 斯様の時。このような時。
- ⑩ 雁鷹に鈴を差す 雁は群をなし助け合う賢い鳥である。『放鷹』三二三頁にも「友を救はんが為に、翼にて鷹をはたき殺す……」と記されている。また、雁は大型鳥で力があるため、雁を狩る

すへし。又一ツには煩^⑧出れハ鷹の心替る物也。加様の

時も鷹の様子見る為に鈴を持て見るがよし。雁鷹^⑧

に鈴を差と云ハケ様の事を云也。

う事は、いつもの定規の切懸のように肉の張り具合も良くなったと見えるけれども、鷹の気分がはきはきしない、生きている鳥を見ても欲しがる様子も無く、羽を寄せて縮こまり、どうも鷹の様子が何時もの日と違っていると思う時、不安を優先して鈴を付けて獲物に向かわせるべきである。又、煩^⑧いが出れば、取りそこないの他に、野性に戻る野返りの心も出て来てしまうものである。このような時も、鷹の様子を見るために（獵に出る時は）鈴を持って行つてみるのが良い。雁取り用の鷹に草むらで見失つた時用いる鈴をつけるといふのは、こうしたトラブルを考えての事なのである。

時、鷹には体力が必要である。餌を多く与え肉色を良くしなければ雁鷹に据え出せない。それほど鷹にとっては苦勞の多い獵である。要するに、雁狩りにはトラブルが起きやすかったために、特に不安な状況のあった時には、雁鷹にも鈴を差したのである。(参考、モンゴルなど、曠野が広がり見通しの良い所での鷹狩りでは鈴を用いない。必要としないのである。)

① 懸ヶ喰す^①カケクワす 鷹匠が口餌を指に持ち、鷹に掛けるようにして食べさせる口餌の与え方。

② 以下に、二、三字から五、六字程度の脱字がある。注④・⑥の行末も同じ。次頁原文参照。この行には、性格・能力の良い形容の語句が続くとみてよい。

③ 耳難く成り^③ミミガタクナリ 主人・鷹匠の音声に注意を向けなくなり。

④ 以下に「成る物也」または「成るへし」などの語が有ったものと思われる。

⑤ 外架^⑤ソトボコ 屋敷の外、野外に用いる架(木製の止り木)。

⑥ 以下に「鷹の拳に」または「鷹にても」などの語が有ったものと思われる。

⑦ 飼たる為に必しも悪し^⑦カイトるタメにカナラズしもワロシ文意不明。「飼たるは必ず悪し」、「飼たる為に必しも宜からす」などの誤字が考えられるが、

37 鷹に口餌を飼口伝之事

一 鷹に口餌を懸ヶ喰するに声を掛すに喰する事^①

第一曲事也。餌を飼候時も口餌を喰するにも声を

掛すに喰すれば何程うらやかに^②

鷹成共耳難く成り、頓てもかたく^③

何時も声を掛けて口餌を餌へし。

一 鳥屋の内にも又は外架杯に繫きたる^④

据にいかにも能口餌を持て据に寄へし。

一 皆人夜据の時口餌を飼也。夜据の飼たる為に必しも^⑤

37 鷹に口餌を飼う口伝のこと

一、鷹に口餌を鷹匠の手から食べさせる時に声を掛けずに食べさせることは第一の悪いことである。普通に餌を食べさせる時も、実獵中に口餌を食べさせる時にも、声を掛けずに食べさせていると、どれほど落ちついて(人慣れのしている)鷹であっても、主人や鷹匠の声に耳を傾けなくなり、そのうちに扱いにくい(鷹になつてしまうのである)。何時も声をかけて口餌をやるべきである。

一、鳥屋の内であっても、又は屋外の架に繫いである(鷹であっても、拳に)据える時には、いかにも鷹の興味をそそるような良い口餌を持って、据えに寄っていくべきである。

一、皆、人は夜据えの時、口餌を飼

「必しも」と「悪し」の間に一行欠と見る方が妥当であろう。「夜据えで口餌を与えてしまふ」と昼飼との問題が生じ、悪い結果となる」という意の字句があったのであろう。

⑧以下二、三文字の脱字あり。例えば「をば」とか。原文、後ろから二行目参照。
⑨押せん為に続き具合によるが、例えばオせんタメに消化させるために。

⑩注⑭参照。

⑪注⑨参照。

⑫注⑩参照。

⑬おち狂ひたる 怖じ狂っている。何かに怖がつて狂ったようになる。

⑭たか 三説考えられる。⑦量。餌の分量。④鷹。⑦高。收穫。

〔原文〕 87頁終り3行目、88頁7行目まで

才一曲(才)餌と何時と口餌を喰ふるを
抑へて喰ひたる何程うに習ふ
存る成犬耳を喰ふはさきく

何時と口餌を喰ふるを
一、才の肉を喰ふは強きく
抑へて喰ひたる何程うに習ふ
一、才の肉を喰ふは強きく
抑へて喰ひたる何程うに習ふ
一、才の肉を喰ふは強きく
抑へて喰ひたる何程うに習ふ

悪し。鷹の毒と成なり。夜据の餌を飼事ハ昼

飼たる餌を持過たる。押せん為に鳥の

羽節か又ハ犬のちまき猪のいかにもこわき所をする也。

是を皆人口餌と心得て飼なり。

一鷹物におち狂ひたる時、皆人口餌を飼也。加様の時飼

う。しかし夜据えの時に口餌をやるのは(必ずしも良いわけではない)。むしろ悪い、鷹の毒と成るのである。夜据えの餌をやることは、昼やった餌を消化し切れずに胃に残している(場合、それを)消化させるために多く食べさせたくないので、そういう時は鳥の羽節か、又は犬のちまきや猪のいかにも強い所など食べにくい所を餌とするのである。(鷹は食べた気になるが、実は胃には幾らも入っていないようにするのである。)是を皆、鷹匠たちは夜据えの時の口餌と心得て飼うのである。

一、鷹が物に怖じ狂っている時、普通の鷹匠は皆、口餌をやりがちである。しかし、この様な時、食わせた口餌は鷹のためにはならず鷹にとつて不要な物である。鷹が物に怖じ狂った所では少しも口餌を食わせずに据え廻つて慣れさせ、人の居ない所の物陰に据え寄り、いかにも鷹に和らかに対応し、拳の上でくつろげさせる。十分に鷹がくつろいだと鷹匠の目に見えた時、いかにも良質の口餌を鷹が食べたとき自覚するほど、いつもより多めに食べさせるのである。これを良い口餌(のやり方)というのである。

一、普段、口餌を食わせる時に、雑

- ⑮ 雌メソウ 三説考えられる。②
二つもの。余計な。不必要な。
①にわとり（二羽雉。鷄）。⑦
鷲。あだ。「たかには成らずして
鷹の雌に成物なり」は⑦・①・
②のいずれの読み方をしても、
「鷹のためにならない」の意と
なる。現代人に例えるなら「ス
トレス逃避のための過食症」に
してしまうことになるからであ
る。
⑯ 不レ喰ニクワサズ 食べさせな
い。
⑰ 覚る程ニオボユるホド 餌を食
べたと鷹が自覚する程度。
⑱ むさとニむざと 雑に。ぞんざ
いに。
⑲ 違却無レ之時ニイキヤク コレ
ナキトキ 相違の無い時。
⑳ キツキ 気付き。

たる口餌⑮ハたかにハ不成して鷹の雌⑮に成物也。おち狂

ひたる所は少も口餌を不喰に据廻りて人なき所の

もの陰に据り寄り、いかにも鷹に和らかに当り

据くつろけて、得と鷹くつろきたると見付たる時

いかにも能口餌を鷹の覚る程喰也。是を能口餌

と云なり。

一 不断口餌を喰するにむさと飼へからす。鷹の合点も

参らざる人はいつも口餌を喰ハ能事と心得、鷹

の機嫌も不知、無理成時喰するなり。口餌喰する

時分はいかにも鷹くつろきて我こゝろと鷹の心と

一ツに成て、少も違却無之時口餌を飼人を上手と云也。

右之五ヶ条能々分別シテ口餌飼申ニオヒテハ、イ

カニキツキシカタキ鷹成共、自由タルへき事不

疑。大鷹小鷹に不依カリソメニモ声ヲ懸スニ口

にやつてはいけない。鷹についてよく分かつていない人は、いつも口餌をやることは良い事であると心得て、鷹の機嫌の良し悪しも考えず、無理な時に食べさせてしまうものである。口餌を食わせる頃合いというのは、いかにも鷹がくつろいで、鷹匠の心と鷹の心とが一つに成って、少しも違わない時であり、そういう時に口餌を与える鷹匠を上手な人というのである。

右の五ヶ条をよくよく考え分かつて口餌をやるならば、いかにか付きの悪い鷹であつても、鷹匠の自由になることは疑いが無い。大鷹小鷹に依らず、仮初めにも声をかけずに口餌を食べさせるようなことは第一の間違った事である。よくよく口伝を相伝すべきことが肝要である。

- ①この図は、²²とほぼ同内容である。²²は「鶴雁鷹の肉合出来しは見立様口伝之事」であり、大物捕り用の鷹見立て様についてである。
- ②肉当り¹¹シシ アタリ 鷹の肉付きを診断する。ここでは、鷹の健康状態を診る。
- ③黒眼¹¹クロメ 瞳孔。「眼の真、黒眼共に座る」ことは、目の絞り・視力の鋭さと関係する。目がしっかりと落ちついて動じない様である。²²注①参照。
- ④眼の内いかにも涙くみたる様¹¹メのウチいかにもナミダぐみたるサマ 目の瑞々しき。健康の尺度となる。²²の二行目参照。
- ⑤後頂¹¹コウチョウ ²²注②参照。
- ⑥うけかひ（受飼） ²²注⑧参照。
- ⑦惣身毛立ぬ¹¹ソウシン ケタテぬ 体中の毛を立てて揺るがせない。²²注⑨参照。
- ⑧底¹¹ソコ 地肌の奥。（参考、この条は²²の第三条とほぼ同文である。²²で「疔」とあった文字は「底」であることが判明。）
- ⑨この条、²²の第四条とほぼ同文。
- ⑩この条、²²の第五条とほぼ同文。
- ⑪この条、²²には無し。血色が悪いのは駄目である。

餌ヲ喰スル事第一ノ曲事也。能タ口伝之可
相伝事肝要也。

鷹¹¹の肉当りたる見立様之事

- 一眼ちいさく成たるか吉。
- 一眼の真¹¹黒眼共¹¹すハリたるか吉。
- 一眼の内いかにも涙くみたる様に見ゆるか吉。
- 後頂¹¹の毛を立¹¹うけかひの毛をも立¹¹惣見毛立ぬか吉。
- 肉色ハ黒く青くして能目を付て見るに底ハ少シ赤き様に見ゆる様成かよし。
- 肉色黒く青くまたら色に見ゆるか吉。是をみたれ色と云うなり。
- 紫色に見ゆる時、捉事有り。
- 赤き色白き色桃色ハ悪し。

鷹の健康状態を診る時の見立て方のこと

- 一、黒眼が小さく絞りが効いているのが良い。
- 一、眼の真と黒眼が鋭く座っているのが良い。
- 一、目の内がいかにも瑞々しく濡れているように見えるのが良い。
- 一、頭の最上部の後ろ側の毛を立て、下嘴の下の毛をも立て、体中の毛は立てないのが良い。
- 一、皮膚の色は黒く青く見えて、よく注意をして見ると、その奥は少し赤いように見える様子なのが良い。
- 一、皮膚の色は黒く青く、まだらに見えるのが良い。是をみだれ色と言うのである。
- 一、皮膚の色が紫色に見える時、（大物を）捕ることがある。

- ⑫きらきら 黒眼の瞳孔が絞ま
ていないで、きらきら動く鷹は
駄目である。放したら逃げてし
まう。鷹の心、目の付け所が定
まっていないのである。㉒では
「きるきる」とあり、また本項
十一條(注⑮の条)の部分が後
半に付いて一條となつてゐる。
⑬この条、㉒の第七條とほぼ同文。
⑭ふ立 不立。立てず。
⑮この条、㉒の第六條後半部分に
ほぼ同じ。
⑯気さしりきざし 気の状態。氣
配。
⑰心得て この条、ここまでは㉒
の第八條とほぼ同文。「心得べ
し。」で条を終了。
⑱真に ㉒の注⑪参照。
⑲この条、㉒の第九條とほぼ同文。
⑳おもてに ㉒では「日面に」。
㉑当たる ㉒では「肉当たる」。
㉒鷹匠の ㉒では「鷹の」。

一目大きに目の真^⑮きらきらと見ゆる時悪し。

一頂の毛を立すしてうけかひの毛をもふ立惣毛をゆる
す事悪し。

一目かわきたる様に見ゆる事悪し。

一鷹の気さしを見るに物毎にほしかり候時はいまた
肉前成と心得て、能据廻して見るに鷹の真^⑮に

成たる時を上の時と心得へし。

一鷹の肉色を見るにおもてに据廻し日を請て見る

時ハ紫色杯ハ赤く見ゆる物也。日裏の方に据向て

見れハ黒色に見ゆる物也。然るに依て、日裏と表

の見立を能々心を付、分別して見る事専也。我

鷹に不依、人の当たる鷹杯を能々見覚て、我心に

切懸を仕見る時、鷹の肉違たるか又ハ鷹匠のあてかひ

違たるかも能見分て、人の鷹にて見覚えたるハ後迄

一、皮膚の色が赤い色だったり、白
かったり、桃色だったりするのは悪
い。

一、黒目の瞳孔が絞まっていないで、
目の真がきらきらと動いて見える時
は悪い。

一、頭頂の毛を立てず、下嘴の毛を
も立てず、体中の毛を揺らすのは悪
い。

一、目が乾いているように見えるこ
とは悪い。

一、鷹の気配を見るに、見る獲物、
見る獲物を欲しがる時は、まだ実獵
に必要な体重調整が出来ていないと
心得て、よく据え廻して見るうちに、
鷹の入れが本物になる、その時を上
の潮時と心得るべきである。

一、鷹の肉づきの色あいを見るに、
外に据え廻して目を受けて見る時は、
紫色などは赤く見えるものである。
日陰の方に据え向けて見ると(紫色
などは)黒色に見えるものである。
だから、日陰と日向の見立てをよく
よく気を付けて考えて見ることが専
ら大切である。自分の調教した鷹に
依るのではなく、他の鷹匠が餌調整

②③忘れぬ物成に依てハワスれぬモノナルにヨリて ②では「はづれず」。
 ②④肉色ハ ②では「肉相色相ハ」。
 ②⑤細くハコマカク ②では「切々」。
 ②⑥大事也ハダイジ ナリ ②では「上」に「秘事」の二字があり、「秘事大事也」となっている。

①鷹据拳渡 ③節の題は、内容から「鷹据上拳渡に悪敷事」又は「鷹据拳渡仕様之事」であろうか。この節を通して写し手に「拳」と「拳」の混同があり、ここで「拳」と書かれている字は内容から見て、すべて「拳（こぶし）」である。従って「タカ コブシニ スエ ワタス」と読んでおくことにする。以下同様。

③忘れぬ物成に依て、人の鷹の相しらひを見分て分別すへし。惣別鷹の肉色ハ一日の内に二度も三度も替る物成に依て、細く肉色を見る事專也。

右之十三ヶ条ヲ能々分別して見覚るゝおゐてハ

鷹の肉相出来シホノ見立少も違フヘカラス。此

上ハ疑ナク能見分へき事肝要也。此口伝ノ書

ハ人ニ相伝スヘカラス。一段大事也。

③鷹据拳渡

②一、拳高くすゆる事

③一、うてくひおれ拳先さくる事。

⑤一、おやゆひの節高く成事。

をした鷹などをよくよく見覚えて、我心にどの状態で獵をさせるかという切懸けを問いかけてみる。その時鷹の餌調整が違っているか、又は鷹匠の扱い方が違っているかも、よく見分けて、他人が仕上げた鷹で見覚えたものは後まで忘れないものであるから、他人の鷹の扱い方を見分けて考えていくのである。

おおよそ鷹の肉付きや血色は、一日のうちに二度も三度も替るものであるから、細かく肉付きや血色を見ることが大切である。

右の十三ヶ条をよくよく考えて見覚えると、鷹の体調や獵をさせる潮時の見立ては、少しも間違ふことが無いだろう。此の上は疑いなく、よく見分けるべきことが肝要である。此の口伝の書は人に伝えてはいけない。一段と大事なことなのである。

④鷹を拳に据えたり迎かえ取る時のやり方

①一、拳を高くして鷹を据えるのは悪い。

②一、腕首が折れ曲り、拳先を下げた状態で鷹を据えるのは悪い。

- ② 挙高くす(据) ゆる事コブシ
タカク すゆるコト 拳へ鷹を
据える時の拳の位置は腕を下
肢を直角に曲げる。即ち拳を
肘と同じ高さにし、拳を持ち
上げるようなことをしてはい
けないのである。拳が高いと
安定しないし、手全体が疲れ
ることになる。以下五条、簡
条書であるが、文として見る
ならば「事」の後に「悪し」
が付くことになる。
- ③ うて(腕) くひ(首) お(折)
れ 水平にしておくべき腕首
を折り曲げる。
- ④ 拳先き(下) くる事コブシ
サ キさぐる コト 腕首を折り
曲げ拳の先を下げる(悪し)。
鷹は、しっかりと安定した場
所につかまる習性がある。拳
の先まで肘から水平であると
良いのである。
- ⑤ 節高く成事コブシ タカク
ナルコト 親指の節高くなる
こと(悪し)。拳の握り方は親
指の節を上に向けてないで、
指先を下に向けて人差し指に
囲み包まれるようにするのだ
である。
- ⑥ 拳先とか(尖)るコブシ
サ キとがる 拳の先が尖る。
拳の先は平らに丸味を帯びる
のが良い。
- ⑦ 拳まへ(前)へまわ(廻)る
腕を脇に付けた状態で肘を折
り、拳を真っ直ぐに伸ばすの
が正しいのであるが、肘を折
り曲げると、つい拳が鷹匠の
胸の前へ廻って来ることがあ
る。それを戒

一 拳先とかる事。

一 拳まへ、まわる事。

右之五ヶ条常々嗜据立可申事肝要也。

一 大鷹小鷹に不依鷹据拳の事ハ先我身を直に

片腰のひつまぬ様に嗜、肘の折廻しより拳の先迄少

も規の違ハぬ様に構て、扱鷹の据廻シハ八分の引

込二分のとめと据立へし。此据立に足革の

相しらひ口伝有。

一 大鷹に依らず拳を自慢して引据すに持合て

据とむる事第一鷹の毒也。色々の様有へし。

一、鷹を据える拳の親指の節が高くなるのは悪い。

一、鷹を据える拳先が尖るのは悪い。(拳先きは止まりやすいように平らになるのが良い。)

一、肘を折り曲げた先の拳が鷹匠の体の前面へ廻ってくるのは悪い。(脇の前面に真っ直ぐ伸びていると良い。)

右の五ヶ条のことは常々心がけ据え立てることが肝要である。

一、大鷹であっても、隼・鶴などのような小型の鷹であっても、鷹を拳に据え上げるには、まず我身を姿勢よくし、片腰がひずまないように心掛け、腕は肘の関節から拳の先まで、少しも決まりに違わないように構える。さて鷹の据え廻しは、鷹を鷹匠の脇に八分の引き込み二分の止めで据え立てるべきである。此の据え立てに差す足革のやり方については口伝がある。

一、大鷹に依らず、どんな鷹でも、拳の上に乗せて自慢して、脇に引き据えるという基本的なこともせずに持ち合って見せびらかし、きちんと

めていのである。脇の位置前方に拳がくるようにするのである。

⑧ 嗜据立可レ申事ニタシナミ ス
エタテ モウスベキ コト
「嗜む」は「心がける・心得る・行なう」。

⑨ 書きぶりからすると、ここで四節が終り、次から四節が例えば「鷹据拳据立之事」といった題で始まる趣きである。書写段階で欠題となったと見るべきか、ここまでの五ヶ条を四節の一部分と見る「鷹之書」作製者の意図と見るべきか。いずれにしても、内容的には大きく見れば一貫した節とらえても差しつかえは無いだろう。

⑩ 我身を直にニワガミをロクに自分の姿勢を真っ直ぐにし。「参考、鷹を拳に据える時は姿勢をよくし、据える腕を脇にきちんと固定することが必要である。鷹匠の修業は、鷹が据えられるようになることが、基本の第一であり、常に師匠から「脇をかためよ」とか「脇に本をはさんで落ちないように据えよ」とか注意されると言う。」

⑪ ひつ(歪)まぬ ひずまない。曲がらない。ねじれない。「参考、片腰がひずむのは姿勢の悪い様である。腰をすえて、鷹匠の upper body が揺れ動かないようにしなければ、鷹は安心して拳に止まらない。」

⑫ 肘ニヒジ 肘。脇。「肘(ユウ)」は本来は「こぶ」である。

一 大鷹小鷹に依らず肩へはひ懸る鷹を拳を差

出す事悪し。差出せず猶以肩に懸る也。其時拳

を前へ廻し据手の顔と鷹の白を合すへし。如

斯分別して据立事におゐてハ後にハ頓て肩か、らぬものなり。

一 大鷹小鷹に依らず拳高く据る事第一曲事也。

いかに腰つよき鷹成共、拳高く据れハ頓て腰よわ

に成物也。不断拳に心を付て嗜、ひきく据立へし。

拳の高きハ色々損有へし。

一 鷹のとはいの時、身を除て拳を差出す事悪し。

何時も鷹のかたへ我身を懸り自由に鷹を引廻ス

ことくに我身のかまへをすへし。

した据えもせずに拳に乗せているのは鷹にとって第一の毒である。色々の悪い様子が出て来るであろう。

一、大鷹小鷹に依らずどんな鷹であっても、拳から肩へ這い上ろうとする鷹を我身から離そうとして、拳を差し出すことは悪いことである。差し出せば猶さら以て肩に上つて来るものである。其の時、拳を正面に廻し、鷹匠の顔と鷹の顔をにらみ合わせるように。このように分きまえて据え立てるならば、後には次第に肩に上らなくなるものである。

一、大鷹小鷹に依らず、拳を高くして鷹を据えることは、一番悪いことである。いかに姿勢が落ちついていく鷹であっても、拳を高くして据えれば(安定しない所に止まらせられることになるので、どれ程も時が経たないうちに腰の落ちつかない鷹になつてしまうものである。いつも拳に心を向けて行い、拳を低く据えるべきである。拳の高いのは、色々良くないことがあるものである。

一、鷹が拳から飛び出す時、鷹匠が身を退けて拳を差し出すのは悪い。何時も鷹の方へ我身を寄り懸けて、自由に鷹を引き廻すかのように主導権のある身の構えをするべきである。

- ⑬ 規の違ハぬキのタガわぬ 定められた通りの。注③④⑦参照。
- ⑭ 八分の引込二分のとめハチブのヒキコミ ニブのとめ 鷹を拳に据えて歩き廻る時、拳を前方に突き出す形になると鷹は怖がるものである。従って、出来るだけ鷹匠の脇近く、体に近寄せて据え廻るのである。肘を折った腕を八分がた後ろに引き、二分が残る程度で拳に鷹を据えれば、鷹は鷹匠の脇に居る形となり安心するのである。
- ⑮ 拳 これも「拳(コブシ)」の誤写。己の拳上の鷹。「放鷹」のことを「ギリ コブシ(握り拳)」とも言う。
- ⑯ 引据ハヒキスエ 肱を腹の脇にしっかりと据えること。
- ⑰ 持合テモチアイテ 見せびらかして。適当に持ち合わせて。
- ⑱ 据とむるハスエとむる きちんとした据えを中断していること。鷹を据え止まらせていること。
- ⑲ は(這)ひ懸るハはい力かる 腕から這い上ってゆき、肩に止まろうとする。拳より肩の方が高いから、鷹は上りたがる。
- ⑳ 差出せず 「差し出せハ」の誤写か。
- ㉑ 据手の顔と鷹の白を合すへしハスエテのカオとタカのカオをアワすべし。鷹匠の顔と鷹の顔を向かい合わせるとよい。顔と顔を見合わせれば、鷹もどちらが主人か分かる筈。
- ㉒ 拳高く据る事 「拳」は「拳」。
- 注①参照。

① 鷹の白と我身の肩との規違ハぬ様に据立へし。

殊に腰よわ成鷹杯ハ肩よりも鷹の白高く

成様に据れハ弥腰よハに成物なり。

② 右々条之通、能分別して高据立ルニ於てハ、悪敷

成事不可有。常々心を付テ拳を嗜据立へシ。

〔巻五終〕

一、鷹の顔と鷹匠の肩との位置関係の決まりを違えないように据え立てねばならない。特に腰がよく坐わっていない鷹などには、肩よりも鷹の顔の方が高くなるように据えようと、ますます腰の坐りが悪くなるものがある。

右、簡条の通り、よく分別して鷹を据え立てる場合には、悪くなることは有る筈がない。常々、心して拳のやり方を正しく行い据え立てるべきである。

巻五終り

- ②③ 腰つよき鷹Ⅱコシつよきタカ
坐ったり構えたりする姿勢をし
つかり保つ鷹。
- ②④ ひきく 低く。
- ②⑤ と(飛)はいの時 飛び出す時。
拳から鷹を飛ばす、習せる時。
「とばふ」は「拳より鷹の飛び
出すこと。」(放、六七頁)
- ②⑥ 除てⅡノケて 引いて。外らし
て。
- ②⑦ 鷹の白と我身の肩との規Ⅱタカ
のカオとワガミのカタとのノリ
鷹の顔と鷹匠の肩との位置関
係の決まり。鷹匠の肩の線と、
鷹の顔の位置とが同じくらいな
のが良い。鷹匠の顔を見上げさ
せるくらいの位置。
- ②⑧ 弥Ⅱイヨイヨ いよいよ。ます
ます。
- ②⑨ 右ケ条Ⅱミギ カジョウ 「右
六ケ条」、「右七ケ条」といった
数字の部分が欠。最初の「事
(悪し)」で括られる五ケ条の部
分を一条に数えれば「七ケ条」
となり、その部分を別節として
外せば「六ケ条」となる。その
辺りの整合性が怪しくなった書
写段階で数字が無くなったのか
もしれない。